

令和3年4月14日

令和2年度 特別の教育課程の実施状況等について

大阪府		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
大阪教育大学附属平野小学校	国立大学法人大阪教育大学	国立

1. 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表ウェブサイト名・URL 等
大阪教育大学附属 平野小学校	https://osaka-kyoiku-hirasho.org/list/feature02/#712

2. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

小学校の全学年で、「生活科」「総合的な学習の時間」「特別活動」の全てをまとめ、新たに「未来そうぞう科」として設置する。また、各教科・領域においても、「各教科・領域における未来そうぞう」として、未来そうぞう科を中心とした全ての教科・領域を通して未来をそうぞうする子どもを育むカリキュラムを作成し、実施する。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

本校の学校教育目標は「ひとりで考え、ひとと考え、最後までやりぬく子」と設定して、50年以上となる。この教育目標をもとに、本校では、主体性・協調性・創造性が育まれるよう学校教育を進めてきた。この「未来そうぞう科」は、本校の学校教育目標に繋がる「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」を育むことをめざしている。本校でのこれまでの取り組みをベースとして、子ども自らが未来をそうぞう（想像・創造）することのできる「実践力」の育成に取り組みたい。

「未来そうぞう科」には、「自分自身を対象とするA領域」「集団や人間関係を対象とするB領域」「広く社会や自然を対象とするC領域」という3つの領域がある。また、本校には豊かな自然、地域との繋がり、海外からの数多くの視察の機会など、未来をそうぞうする上で材となりうるものが豊富にある。3領域での学びにおいて、これらの特色をいかし、未来をそうぞうする子どもの育成を継続して行っていきたい。

(3) 特例の適用開始日

令和2年4月1日

(4) 取組の期間

特に期間を定めず、継続して取り組む

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ◎計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ◎実施している
- ・実施していない

<特記事項>

各学年における未来そうぞう科の授業や発表において、保護者の方に参画を募り、子どもたちの未来そうぞう科の学習に関わっていただき、その評価をいただいている。また、地域の方にも、ゲストティーチャーとしてお越しいただいたり、地域を訪問してお話をお聞きしたりする中で、子どもたちや教師から未来そうぞう科の取り組みの内容や目的について説明したり、これまでの学習の成果発表を聞いていただいたりしている。更に、例年2月の教育研究発表会においては、教育関係者に向けて、本校の未来そうぞう科の研究成果について授業公開を行い、その成果を発信している。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

本校の学校教育目標「ひとりで考え、ひとと考え、最後までやりぬく子」のもとで大切にしている「主体性」「協調性」「創造性」の3つについて、本特例により、態度のみではなく、「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」の3つの実践力の育成もめざしている。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

未来そうぞう科においては、どんな状況においても、自ら考え、みんなで共に協力し、あきらめずに、よりよい未来を想像し、創造することのできる「未来をそうぞうする子ども」の育成をめざしている。また、どんな物事に対しても、新たな意味や価値を見出すことのできる「そうぞう的实践力」に重きをおいて取り組んでいる。実際に取り組んだ子どもの声として、「未来そうぞう科のホタル池の活動を通して、人と協力することの大切さを学べた。」「これまでは将来の夢は持っていなかったけれど、未来そうぞう科で未来について考えていく中で、夢を持つことができるようになった。」「たとうまくいかないことがあっても、見方を変えたらそれがきっかけになって、やりとげることができたから、最後まであきらめないことが大切と学べた。」など、子どもたち自身が、未来そうぞう科の学習の中で、自らの体験を通して、人との協力の大切さや、自らの目標に向けて、自己調整を行いつつ粘り強く学びを創り続けていくことの重要性に気付くことができている。

この学びにいたるためには、教師自身の関わり方が非常に大切である。常に子どもの声に耳を傾け、子どもの気づきや語りに注目し、どのような学びが創られているのかを、「共同探究者」としての立ち位置で子どもの学びをサポートしていく必要がある。しかし、その関わり方についての手法が確立できておらず、現状は教師個別の関わりに頼っているという課題がある。

5. 課題の改善のための取組の方向性

今後の研究において、全教員で同じ子どもの姿を見ることができる「研究授業」を通して、教師の「共同探究者」としての関わり方や評価の在り方を探り、子どもの「語り」に注目して、そうぞう的实践力の育成に向けて研究を進めていく。また、カリキュラムを定期的に見直す機会を設け、新たな計画カリキュラムを作成するなかで、共同探究者としての関わり方の手法を分析し、その効果についても検証していきたい。